

文化

日本民俗学の祖とされる柳田国男(1895-1982)年が誕生150年を迎えた。関連する書籍刊行やシンポジウム開催で再評価が進む。エコロジー(生態学)・コモンズ(入会地)など今日的なテーマを考へる上でも注目されている。

柳田国男 進む再評価



40代半ばとみられる柳田国男(成城大学民俗学研究所蔵)。同研究所で29日まで開催中の「柳田国男と民俗学—はじまりとしての旅—」展で展示中

「先祖」は未来の子孫の幸福につながるような「計画」を積み重ねる存在で、その舞台が世代を超えて維持される「家」だった。中核には「先祖」を神としてまつる考え方があったが、明治以来の国家指導層は国民への「同情」を欠いた人倫的介入で、そうした古風な信仰を破壊した。

柳田を論じた「故郷と未来」で群像新人評論賞を受賞している歴史学者(中世都市史)の長崎健吾氏は、8月刊行の新刊「柳田国男 計画する先祖たちの神話」(講談社)で、柳田がそうした考え方を生涯持ち続けたと読

み解いた。同書は柳田の名著「先祖の語」の解説本でもある。第2次世界大戦で「家」を持てないまま戦死する若者たちを自らの当りにして、柳田の思想は迷走した面もある。それでも彼は「歴史家」としても優れていたという。「神社・祭祀・反対運動」に取り組んだ南方熊楠との交流もあり、柳田にもエコロジーを先取りするような面があった。それは「先祖」が子孫を思つて、自然との付き合い方を考へていくこと(エコロジー)。

1991-2000年刊行の本3冊をまとめた「定本 柳田国男の発生」(青土社)を8月に出した民俗学者の赤坂憲雄氏。「柳田の足跡をたどる旅を通じ、日本文化の百科全書ともいふべき成果に触れようと考えた」現代性を感じさせる柳田の著書としては、地方から都市への人口流入の歴史をたどった「都市と農村」を挙げる。「入会

地」という共有の財産を持つことで、人々がつながる可能性を説いており、今でもコモンズ論。相互扶助にもつながり、少子高齢化の現代においても参考になります」

赤坂氏、国文学者の三浦浩之氏らが編集委員となり、22年に「柳田国男 自筆 原本 遺野物語」(岩波書店)が出版された。自筆原稿、初校、草稿本の全ページが写真で紹介されており、研究の進展が期待される。

今年3月には東京都新宿区の早稲田大学でシンポジウム「柳田学の現代的意義を考へる」が開かれた。まず作家の黒川創氏が講演。日華併合など柳田が経験した時代の変化と著書の関わりを指摘したうえで「保守主義者」とのイメージを検証し直す必要があるのでは、と問いかけた。

その後「東洋」(言葉と「ミニエーション」というテーマで研究者が発見、討論した。中国文学者の竹内好と柳田の関係について語ったのは岐阜大学教授(日本近代史・思想史)の田澤晴子氏。1950年の2人の対談はかみ合わなかったが、竹内は開拓的な仕事をした日本の近代文学者の一人に柳田を挙げるなど、その言葉は考へるべき問いとして長く残ったとみる。

シンポジウムをまとめた「柳田国男 現代に生きる思

考」(図書出版みぎ)が来年1月刊行される。シンボの呼びかけ人である早稲田大学教授(日本史)の鶴見大郎氏は「柳田は同じ言葉でも、時期によって定義をずらす。『明治大正史 世相篇』(角川ソフィア文庫)で東京大学副学長の佐藤健二さんが手がけた注釈は

それに対応するものもなかったので、その発表も興味深かった」と振り返る。その上で「生誕100年のときは柳田を直接知る人が多く存命したが、50年が過ぎて状況は変わったと述べて、研究は新しい段階を迎えているとの認識を示す。

(中野悠)